

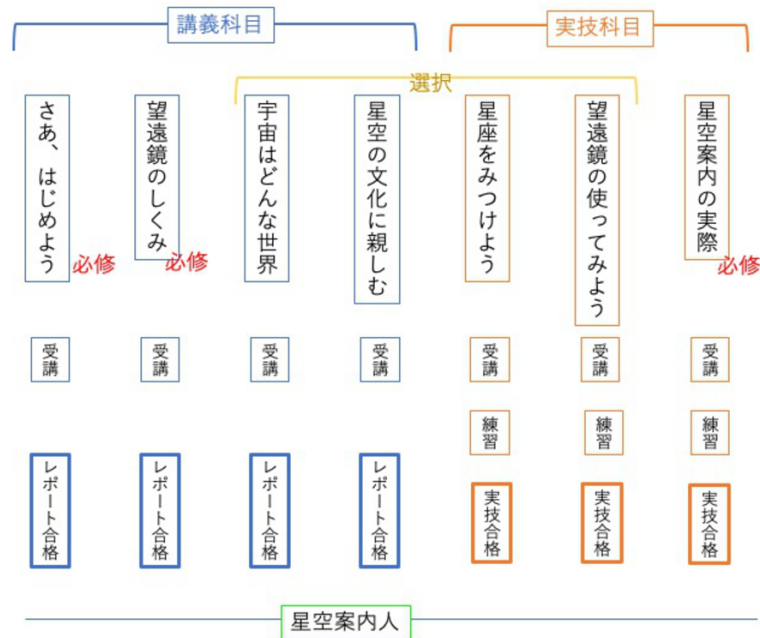
## 1.3 準案内人と二段ロケット方式

### 1.3.1 準案内人誕生の歴史

星空案内人資格認定制度の黎明期<sup>3</sup>には試行錯誤を繰り返しながらカリキュラム・教科書・制度の枠組みなどが徐々に完成されていきました。準案内人という仕組みもその中で誕生しました。

制度がスタートした 2003 年、すぐに何人かの星空案内人が誕生しました。しかしその後、なかなか案内人の資格を取る人がいません。最初は、すでに星空案内の力を持った方が認定を受けたので簡単に資格がとれたのでした。しかしその後は、一から勉強を始めて星空案内人の資格に挑戦される方が多かったです。この場合、資格取得はとても難しいものでした。

当時の資格要件は下図のように、必修科目三科目と選択科目のうちの三科目の合格が必要でした。この基準は現在も同じです。

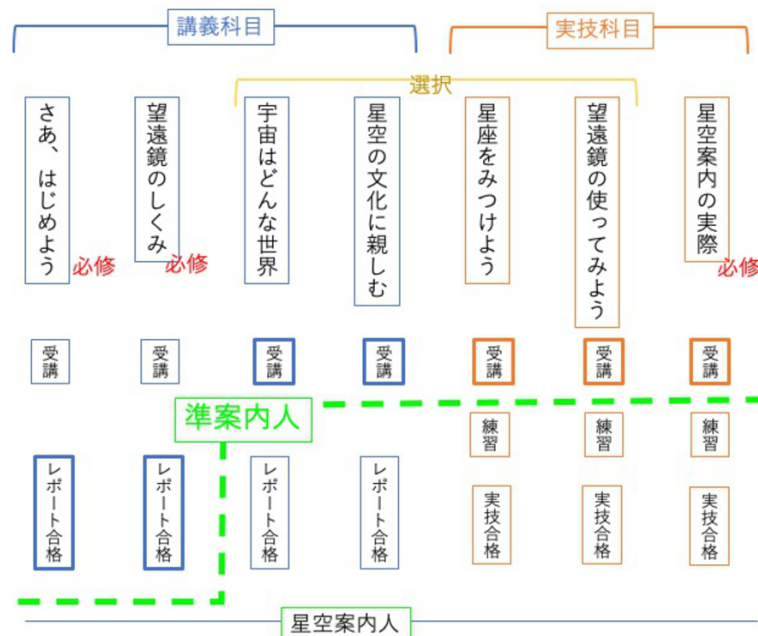


<sup>3</sup>2002 年ころから全国展開が始まる 2007 年ころまでのおよそ 6 年間

勉強を始めたばかりの人にはこれはとても高い基準です。とくに、実技科目が大変です。

たとえば、「星座をみつけよう」を考えてみましょう。読者のあなたが小さい頃から星空に親しんでいたとすれば、実技試験に出てくる有名な星座を見つけるのは何の苦勞もないでしょう。しかし、星は好きけど星座はよくわからないというところから出発する場合はどうでしょう。夜の星空を何度も何度も見て星座を覚えていくのはとても根気のいることですし、時刻や季節によって星座の形が回転しますので同じ形でも違って見えてしまいますから色々な時刻や季節で見慣れる必要があります。天気も、いつも良いわけではありません。ですから、練習して認定試験まで進むには大変時間がかかります。その間に、仕事が忙しいなどでモチベーションが下がってきます。

本制度で設定した資格のレベルは決して高いものではないと思いますが、それでも、初心者にとっては非常にハードルは高いものでした。いろいろな議論と研究を重ねて誕生したのが下図のような準案内人という中間ステップです。



ここにも試行錯誤がいっぱいありましたが、当時の講座スタッフの村上紗知子さんが奮闘してくれて準案内人という仕組みが完成されました。村上紗知子さんは準案内人の生みの親です。

この二段階方式によって資格取得が容易になりました。星空案内人の講座の受講生の 90%近くは準案内人の資格をとることができるようになりました。そして、さらに挑戦しようと思った人が気持ちも新たにして案内人の資格取得に挑戦するようになりました。受講生の 10%-20%が星空案内人の資格取得まで到達できるようになりました。

現在までの経験でいえることは、準案内人という資格は本制度が機能するためには必須だということです。

### 1.3.2 二段ロケット方式の誕生

山形での当初の講座は、全体で4ヶ月ほどの講座の期間中に実技科目の練習をしたい方には練習時間を設け、できそうな方には実技試験を受けていただくようにしていました。受講生の中には実技練習やりたくてやりたくて仕方ない方もたくさんいます。実技の練習は晴れないとできないので練習の日程を十分に準備しないと希望に沿うことができません。実技の練習と実技試験のために必要なマンパワーは相当なもので、講座期間中スタッフは息も絶え絶え、、、大変なことになりました。講座の開講だけでも大変なのに。

頑張って指導したのに、星空案内には興味なく望遠鏡操作だけわかれば良いというかたもおいででした。そのときはスタッフはがっかりです。スタッフとしては労力をかける以上、星空案内人になっていただきたいです。

そこで誕生したのが二段ロケット方式です。

まず、最初に講座を開講しますが、実技科目に関係した練習は一切おこなわず、準案内人の資格を目指していただきます。どんなに要望があっても望遠鏡の練習などはしないでまず準案内人になっていただきます。こ

れがロケットの一段目です。準案内人になったら資格認定書の授与式を盛大に行いお祝いをします。

次に、準案内人から案内人に進むためのコース、二段ロケットを準備します。そこで、準案内人の方にロケットの二段目(星空案内人養成コース)に乗るかどうかを判断していただきます。乗ると決めたら二段ロケットの連絡網(MLなど)に登録します。準案内人までで良いというかたはこれで卒業し、準案内人として活動します。(もし後日、案内人になりたいくなれば、二段ロケットに乗りたいと申し出ていただければいつでも乗れます。)

二段ロケット目に乗った方と既に案内人になった方、講座運営者が連絡をとりながら練習の場を設けたり、実技科目の認定試験を行ったりして案内人が養成されます。二段ロケット方式ではスタッフの負担を最小限にして案内人を養成することができます。実施団体が定常的に行っている観望会などの活動が二段ロケットの練習や試験場所になると非常に効率が良くなります。

また、二段ロケットに乗る方には会費を払って実施団体の会員になっていただくという方法も取れます。そうすれば、ボランティア保険に加入する費用、実技指導のための費用なども賄えます。

準案内人から案内人になる割合はだいたい20%くらいが標準的です。例外なのは開講初年度あるいは2年目くらいの初期の講座で、このときは非常にモチベーションが高い方が集まるので50%以上になると思います。しかし、これは特殊です。

なお、二段ロケット方式は本制度の運営規則で定められたものではありませんので、実施団体によってこの方法が適さないあるいはもっと別の方法があるということも考えられますのでその時は採用しなくても結構です。各実施団体に工夫してみてください。

### 1.3.3 準案内人の魔法

準案内人でとどまり、案内人にならなかった人がいることは、主催者側としてはせっかく講座をしたのにとガッカリした気分になったりするかもしれません。また、なんとか案内人になって欲しいと思うかもしれません。ところが、この考えが間違っていたことがその後わかってきました。全国の星空案内人の活動を遠くから眺めていると、案内人の活動よりも準案内人の活動の方が大きな力を持っていることに気がつきます。

理由のひとつは、準案内人の資格をとった人の数がとても多いこと。案内人にならなかったからといって何もしないわけではなく、準案内人の方は観望会の手伝いなどいろいろな活動のお手伝いをしてくださいます。案内人の資格を取らないで気楽な気分で活動する方が動きやすいとおっしゃる方もいます。実施団体のサポートという面でも準案内人の皆さんのパワーは素晴らしいものがあります。

準案内人の活動は観望会など目につきやすいものだけではありません。準案内人の方は見えないところで、たとえば、職場や近所の隣人に星空の楽しみを伝えたりしています。また風の便りで、講座を受けてもう何年も姿を見せない方が近所の幼稚園で星の話してたよ、とか、趣味の短歌に星を織り込んでいるよとか、伝わってきます。講座以来お会いしていない準案内人の方も見えないところで小さな星空案内をしているのですね。

このような小さな活動をする準案内人がたくさんいることの効果は非常に重要だと思います。なので、準案内人の資格だけの授与は決して報われない仕事ではなく重要な仕事をしているのだと思います。準案内人の資格認定はとても大切です。

(なお、本制度では準案内人も含めて星空案内人と考えて、資格の名称は「星空案内人(準案内人)」となっているのはこのような背景があります。普通自動車免許の限定と似た感じですが、どちらも普通免許ですが、一方は(AT限定)が付いているといった感じですが。星のソムリエ<sup>®</sup>の愛称も案内人、準案内人どちらにも使っていただけます。)